

新 物語  
今昔物語 第27話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑬  
「両岸に 笑顔ふりまく やかた舟」

「やかた舟」



野崎参りは、江戸時代の中頃に慈眼寺（野崎観音）で復興の一つとして営まれた、旧暦4月1日から10日までの無縁経法要や、秘仏の十一面観音の特別開帳など、参詣者の誘致に努めたことをきっかけとして始まったと言われています。宝永年間（1704～1710）ごろは庶民の生活も豊かになり、大坂から日帰りで参詣できたことから、次第に盛んになったようです。近松門左衛門の浄瑠璃「女殺油地獄」にもその参詣の様子が演出されています。

参詣路は、大坂天満の八軒家浜から寝屋川をさかのぼり角堂浜（現在の住道駅北側）に向かいます。ここで船を乗り換え観音井路（現谷田川）に入り、さらに東へと向かい観音浜へと至ります。ここで船を降り、あとは徒歩で旧四条小学校の北側の道を通り、親鸞の直弟子の唯信が建立した専応寺の太子堂を参詣した後、野崎観音へと至るものでした。

野崎参りは、東海林太郎の「野崎小唄」にもみられるように、やかた舟など船で参詣



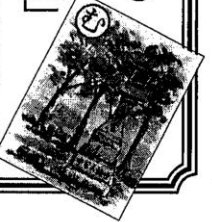
野崎参りの絵図【「河内名所図絵」享和元年（1801）刊行】

するのが主でしたが、寝屋川の堤道を徒歩で参詣する人々も多くいました。船でいく人々、堤道を歩く人々のその道中の様子は、上方落語「野崎詣り」の「ふり売り喧嘩」が有名ですが、享和元年（1801）に刊行された「河内名所図会」では笑顔で楽しく参詣している人々が描かれており、当時の生き生きとした様子をうかがうことができます。

新 物語  
今昔物語 第28話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑭  
「村なかに おかげまいりの石灯籠」

「石灯籠」

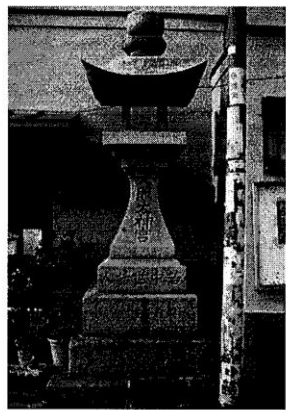


「おかげ参り」は、江戸時代に始まった伊勢神宮への参詣のことで、旅支度の準備も何もない者が沿道の人々の施しに頼ってお参りしたことからのように呼ばれています。また、奉公人や子どもが主人、親に無断で参詣していたことから「抜け参り」とも呼ばれています。

この伊勢神宮参詣は数百万人規模になるもので、ほぼ60年周期で慶安3年（1650）、宝永2年（1705）、明和8年（1771）、文政13年（1830）に起こりました。その中で最も盛況を極めたのが文政13年のもので、3カ月の間に当時の日本の総人口約3228万人のうち約500万人が参詣したとされています。

なぜこのような現象が起きるのかは不明ですが、庶民の移動に厳しい制限があった当時、伊勢神宮参詣が理由であれば、どのような行程でもあまり問題にされず、参詣を済ませた後に京や大坂などの見物を楽しむ者も多かったよう、「おかげ参り」が庶民の旅行としての娯楽的要素であったことも大きな要因と考えられます。

その「おかげ参り」を記念して建てられた「おかげ灯籠」と呼ばれる石灯籠が、市内にも残されており、文政2年（1819）に建てられた寺川のおかげ灯籠のほか、最も盛況であった文政13年の「おかげ参り」を記念し、「太神宮」などと刻まれた灯籠がその年や翌年に諸福、灰塚、御領、三住町、中垣内の地域にそれぞれ建てられています。



天保2年（1831）に建てられた古提街道沿いの「おかげ灯籠」（諸福1丁目）

また、慶応3年（1867）に発生した「ええじゃないか」に関する記念灯籠が栄和町と龍間にそれぞれ残されています。（生涯学習課）